



The Pragmatics Society of Japan
日本語用論学会

PSJ2016 CONFERENCE PROGRAM

第19回（2016年度）大会

【発表要旨集】

– ABSTRACTS –

□12月10日（土）

ワークショップ1 Workshop 1.....	1
ワークショップ2 Workshop 2.....	2
ワークショップ3 Workshop 3.....	4
ポスター発表1 Poster Presentations 1.....	6
研究発表 Oral Presentations.....	8
シンポジウム Symposium.....	14

□12月11日（日）

研究発表 Oral Presentations.....	15
ポスター発表2 Poster Presentations 2.....	20
基調講演 Plenary Lecture.....	22
会長就任講演 Presidential Inaugural Lecture.....	23

ワークショップ1 / Workshop 1 (10:00~11:40) B会場 [2階 A201]

● 会話をデータとするメタファー研究の方法と実践

オーガナイザー：杉本 巧 (広島国際大学) / 司会：鍋島 弘治朗 (関西大学)

本ワークショップは、会話をデータとするメタファー研究について、会話データの収集方法や現在進行中の研究事例を示すことで、その手法に関する理解を参加者と共に深めることを目的とする。会話は、最も日常的で基本的な活動のひとつである。会話のなかで、メタファーがどのようなときにどのような形で、何のために使われるのか、それはこれまでのメタファー研究の知見とどう関係づけられるのかを探ることは、今後のメタファー研究の発展にとって大きな意義を持つだろう。第一発表では会話データの収集方法、第二発表では発話の連鎖におけるメタファーの配置からその相互行為的な働きを探る試み、第三発表では概念メタファー理論の観点から会話におけるメタファー写像の働きに関する考察、第四発表では「こう」の働きから見る会話における譬えの使用と他の言語的・非言語的表現の使用との連続性について発表する。

1. 会話データの収集方法

杉本 巧 (広島国際大学)

本発表では、会話のやりとりをデータとして利用可能にする方法を、実演を交えて紹介する。具体的には、収録参加者との事前のやりとりと研究倫理上の配慮、ビデオカメラやマイク、IC レコーダー等収録用機材の選定、収録時の設定と注意点、収録場所の準備をはじめとした実際の収録の進め方、パソコンを使った録画・録音データの処理方法、精緻なトランスクリプト（文字化資料）の作成方法と使用するソフトウェアの扱い方、特に映像と音声とを同時に扱いながら会話データの観察を行うことができるソフトウェア「ELAN」の機能について紹介する。

2. メタファーの配置と相互行為

杉本 巧 (広島国際大学)

会話のやりとりのなかで、ある発話が担う行為は、その発話の相互行為連鎖上の位置及びデザイン（形式）によって、会話の参与者双方にとって理解可能なものとなり、記述可能となる。会話分析の立場から、Drew & Holt (1998)は、慣用的な文彩表現 (Figurative Expression) について、電話会話をデータとして連鎖上の配置を精緻に観察し、トピック移行の連鎖、中でもトピックのまとめのターンで出現しやすく、トピックの終結を導くという相互行為上の機能を果たしていることを明らかにしている。同様に、会話におけるメタファーの発話連鎖上の配置を観察することで、メタファーの相互行為的な働きが明らかになると考えられる。本発表では、会話分析の手法に則り、参加者と共に実際の映像データと文字化資料を観察しながら、メタファーが会話のなかで果たしている相互行為的な働きを探っていくプロセスを実践的に示す。

参考文献：Drew, P. and E. Holt. 1998. "Figures of Speech: Figurative Expressions and the Management of Topic Transition in Conversation." *Language in Society* 27, 495-522.

3. 話の展開とメタファー写像—認知メタファー理論の観点から—

中野 阿佐子 (関西大学大学院)

本発表ではTVのトーク番組での会話のやりとりを題材とし、話が展開する中で観察されるメタファー表現についてLakoff and Johnson (1980)をはじめとする概念メタファー理論の

観点から考察し、会話データを取り扱うことによって、メタファーが作り出される動的な側面をとらえることができることを示す。

認知メタファー理論では、日常の我々の思考の中に遍在するメタファーが強調されるが、会話の中で相互に構築されるメタファーにはその写像関係を顕著に見ることができる。また、一見特異で新奇に思われるメタファー表現の理解には、会話の中で構築される文脈の理解に合わせ、話者の属性を含む広いフレーム的知識が受け手に求められること、さらに他者とのやりとりにおけるメタファーの働きとして、話し相手の発話の内容を受け手が理解していることを示す手段となることを指摘する。

参考文献: (1) Lakoff, G., & M. Johnson. (1980) *Metaphors we live by*. Chicago: The University of Chicago. (2) Grady, J. (1997) *Foundations of meaning: Primary Metaphors and Primary Scenes*. PhD dissertation, Berkeley, University of California.

4. 「こう」を随伴する描写

串田 秀也 (大阪教育大学), 林 誠 (名古屋大学)

会話において話し手が譬えを用いるとき、しばしば「こう」の使用を伴う(例「マユミちゃんはなんかこうあれだね、敷居が低い感じだね」)。だが、「こう」は譬えだけでなく、以下の言語的・非言語的表現にも随伴して用いられる。①動きや形状を描写する身ぶり、②より意味内容の希薄な身ぶり、③引用、④視覚的情報を描写する発話、⑤オノマトペ、⑥ストレートでない言語表現、⑦ストレートに見える言語表現。これらの用法から、「こう」は、話し手がストレートな言語表現によって表すことの困難なある事態を描写しつつあることを標示し、描写に用いられる表現の文脈依存性に注意を向けるよう、聞き手を促す働きを持つと思われる。本研究では、「こう」の働きを補助線として、会話における譬えの使用がどのように他の言語的・非言語的表現の使用と連続しているかを考える。

参考文献: J. Streeck (2009) *Gesturecraft: The manu-facture of meaning*. John Benjamins.

ワークショップ2 / Workshop 2 (10:00~11:40) C会場 [2階 A202]

● 対話理解と基盤化形成をめぐって：マルチモーダル・インタラクションの多角的な研究

オーガナイザー / 司会：吉田 悦子 (三重大大学)

日常の対面会話において、共有基盤 (common ground: CG) や基盤化 (グラウンディング grounding) という概念は、言語・非言語行動のさまざまな場面で働いていると想定される。例えば、照応表現や省略などの言語形式や反復現象に着目した研究では一定の成果が見られるが、共有基盤がマルチモーダル・インタラクションで果たしている役割や、ジェスチャーなどの非言語行動がどのように対話理解に貢献しているのかについてはまだ解明されていないことが多い。本ワークショップでは、5名の発表者が、談話分析、認知言語学、心理言語学、社会言語学の視点から、LEGO タスクと呼ばれる共通のマルチモーダル課題達成対話データに基づき、言語と非言語行動がどのように結びついて基盤化形成に利用され、相互理解や問題解決に結びついていくのかを例証し、対話における基盤化形成のメカニズム解明と共有基盤化モデルの構築を試みる。

1. 課題達成対話における日本人英語学習者の基盤化形成とジェスチャーの同期

谷村 緑 (京都外国語大学)

本発表では、LEGO タスク (Clark and Krych, 2004) を用いた日本人英語学習者同士の課題達

成対話を基に、ジェスチャーの同期がどのように基盤化形成に寄与するのかを分析する。ジェスチャーの同期には、聞き手が話し手を理解したことを示す機能だけでなく、共同的・社会的行為としてお互いの理解が更新されていることを示す機能があると指摘されている (Kimbara, 2006)。しかし、英語学習者同士の基盤化がどのように成立するのかは明らかではない。分析の結果、対話参加者は、適切な表現の探索、思考を示すフィラー(umm)、沈黙などをトラブルの手がかりとして、LEGO ブロックの正しい位置を探るために相互的、協同的にジェスチャーを積極的に同期させ、相互理解に達していることが判明した。これは、言語情報の精緻化の必要性だけでなく、助け合い協働するという社会的要請がジェスチャーを同期させたと言える。

参照文献：(1) Clark, H. H. and Krych, M. A. (2004). "Speaking while Monitoring Addressees for Understanding." *Journal of Memory and Language*, 50(1), 62-81. (2) Kimbara, I. (2006). "On Gestural Mimicry." *Gesture*, 6(1), 39-61.

2. 課題達成対話の基盤化を実現する言語・非言語情報の多重指向性

岡本 雅史 (立命館大学)

本発表では、引き続き LEGO タスクの課題達成対話の観察から、基盤化形成における参加者の多重の指向性と、そうした多重の関与がいかにして一つの「共同活動」(joint activity)として纏め上げられているかを適切に記述するモデル提案を行う。Clark(1996)は言語使用がしばしば複数のレイヤーから構成される「共同行為」(joint action)の一種であり、その達成に共有基盤が必須であることを指摘している。本タスクでも教示者の評価コメントは作業者の理解提示発話とその都度の作業結果の両者に指向しているが、教示者のジェスチャーもまた自身の発話生成を促す自己指向性と作業者の理解を支援する他者指向性の両側面を持つ。基盤化におけるこうした言語・非言語の多重指向性を適切に捉えるため、Clark の共同活動理論と崎田・岡本(2010)の発話事態モデルを接合した新たな認知・相互行為モデルを提示したい。

参照文献：崎田智子・岡本雅史. (2010). 『言語運用のダイナミズム—認知語用論のアプローチ』, 東京: 研究社出版.

3. 統語的プライミング効果の談話的拡張

田中 幹大 (甲南女子大学)

ヒトが文を産出する際に、直前に発話された文の構造を繰り返し産出する傾向があることが心理言語学の研究で報告されている (統語的プライミング効果、Pickering and Ferreira, 2008)。最近の研究ではこのようなプライミング効果が、文理解や文産出の研究のみならず、実験的対話においても起こることが証明されている (e.g., Branigan et al., 2000)。本発表では実際の課題達成対話データに基づき、統語構造を利用したプライミング効果が、自然談話のどんな場面で実際に起きているのかを分析する。その結果、対話進行の過程で、統語以外の様々なプライミング効果がインタラクションに影響を与えていることが見出された。こうした事例を検討し、心理言語学のモデルをマルチモーダル談話へ応用する有効性を主張する。

参照文献：(1) Branigan, H.P., Pickering, M.J. and Cleland, A.A. (2000). "Syntactic Coordination in Dialogue." *Cognition*, 75, B13-B25. (2) Pickering M.J. and Ferreira, V. (2008) "Structural Priming: A Critical Review." *Psychological Bulletin*, 134, 427-459.

4. 基盤化形成において共同注視が果たす役割：指標性からの考察

山口 征孝 (神戸市外国語大学)

本発表は、「基盤化」(Clark 1996)のプロセスに注目し、英語母語話者(NES)と日本人英語学習者(JEL)の課題遂行対話4組を分析し、相手が見えない条件(invisible: IV)と見える条件(visible: V)における談話構造の違いに焦点を当てる。分析の結果、いずれも言及指示(reference-denotation)を必要とするが、さらに指標的(indexical)な機能の重要性が解明された。特に、タスクがVの場合、NESによる談話標識「OK」や評価的メタ発話(“Excellent”)が多用され、一方、タスクがIVの場合、JELによる談話標識「OK」の使用が見られた。更に指示詞(“this”や“that”など)の直示用法が生起しない。こうした「共同注視」(joint attention) (Enfield 2006)が基盤化形成の際に果たす決定的役割を例証し、参与者間の不均衡な関係性が談話構造の違いにどのように反映しているのかを明らかにする。

参照文献：(1) Clark, H. (1996). *Using Language*. Cambridge: Cambridge University Press. (2) Enfield, N. (2006). “Social Consequences of Common Ground.” In N. J. Enfield, & S. C. Levinson (eds.) *Roots of Human Sociality*, Oxford: Berg.

ワークショップ3 / Workshop 3 (10:00~11:40) E会場 [2階 A204]

● Multimodal Metaphors in Taiwanese Culture: Historical Cartoons, Typography, Picture Books, and Coffee Cupping

オーガナイザー / 司会：SAITO, Hayato (National Taiwan University)

Over the past decade, the burgeoning study of multimodal metaphors involving cross-modal interaction between different modes or senses has broadened the potential of pragmatics research. Multimodal metaphors not only manifest the profundity of linguistic meaning in miscellaneous contexts, but also reflect the sophistication of cross-modal message transference. As contemporary researches tend to put more emphasis upon the value kindled off by cultural interplay, our workshop endeavors to contribute new perspectives to the realm of pragmatics and to reflect kaleidoscopic dimensions of the global culture by studying Taiwanese historical cartoons, typography, picture books, and coffee cupping from the standpoint of multimodal metaphors.

References: (1) Forceville, C. & Urios-Aparisi, E. (Eds.). 2009. *Multimodal metaphor*. Berlin. (2) Lakoff, George and Mark Johnson. 1980. *Metaphors We Live By*. Chicago.

1. The cultural context of metaphor in historical cartoons and anthropological perspectives

SAITO, Hayato (National Taiwan University)

This research examines multimodal metaphors related to size, gender, and family through the study of historical cartoons in Taiwan under Japanese rule, and investigates their cultural contexts based on previous Japanese and Taiwanese anthropological studies. The importance of the cultural context as a factor of metaphorical conceptualization was emphasized by Kövecses (2015) and it is especially significant when people construe historical objects. For example, in terms of size, Japan and Taiwan as nations were often personified and descriptions of “small/big” were used by the cartoonist to denote their characteristics and identities. This study demonstrates that this phenomenon could be accounted for by previous ethnographic and anthropological studies working on meanings of smallness in Japanese tradition. Moreover, it further shows how such cultural knowledge based on these studies can be extended to explain the phenomenon in relation to gender and family as well.

References: (1) Kövecses, Zoltán. 2015. *Where Metaphors Come From: Reconsidering Context in Metaphor*. Oxford. (2) Kunio, Yanagida. 2013. *Momotaro no Tanjo*. Tokyo.

2. The Multimodal Investigation of Typography and Colors in Movie Posters in Taiwan

HSU, Iju (National Taiwan University)

The research of multimodal metaphor has been extended to various kinds of topic, one of them being graphic design and text. Typography is essential to this line of research since it relates to both writing and visual elements. Previous studies demonstrated that fonts/typeface have specific “personality”. Though Hanzi is a unique research target for its logographicality and aesthetics, there is scant literature dealing with the typography of Hanzi and their personality. This study aims to bridge this gap through a comprehensive study of typography of Hanzi by analyzing 258 movie posters published in 2016 in Taiwan. The findings show that typeface and background colors are highly related to film genre and producing location. In addition, typeface (especially serif/sans-serif) is the most consistent element cross-culturally. This study further provides theoretical explanations and implications in relation to the above findings, and thus contributes to the theories of multimodal metaphor and typography.

References: Brumberger, E. R. (2003). The rhetoric of typography: The persona of typeface and text. *Technical communication*, 50(2), 206-223. (2) Caldwell, J. (2013). Japanese typeface personalities: Are typeface personalities consistent across culture? Paper presented at the IEEE International Professional Communication 2013 Conference. (3) Childers, T. L., & Jass, J. (2002). All dressed up with something to say: Effects of typeface semantic associations on brand perceptions and consumer memory. *Journal of Consumer Psychology*, 12(2), 93-106.

3. A Tale of Two Cities: A Multimodal Analysis of the Figurative Expressions about City in Picture Books

HUANG, Wen-Yi (National Taiwan University)

Based on the multimodal illustration about city in Taiwanese picture books, this research probes into the multimodal metaphors frequently utilized in sketching diversified urban imageries. From the assaying of the Taiwanese picture-book writer Jimmy Liao’s works characterized by the artistic fusion of plentiful Taiwanese and global cityscapes, it is discovered that city could be cognized via multifarious kinds of concepts such as VIRTUAL WORLD, CONFINED SPACE, COMPLEX LINEAR SYSTEM, etc. On the strength of this peculiar phenomenon, the research evinces that the images of city seem to result from the union of human beings’ physical and psychological interpretations, which tend to depend on simple and complex multimodal metaphors. Furthermore, the individual solitude and interpersonal alienation lurking in the global context are uncovered as well, providing food for thought with regard to human perception of urban culture in the epoch and broadening the possibility of multimodal metaphors to a global horizon.

References: (1) Lakoff, G., & Johnson, M. (1989). *The power of poetic metaphors*. IL: The University of Chicago Press. (2) Forceville, C. (2008). Metaphor in pictures and multimodal representations. In R. Gibbs, Jr. (Ed.), *The Cambridge Handbook of Metaphor and Thought* (pp. 462-482). Cambridge: Cambridge University Press. (3) Fauconnier, G. & M. Turner. (1998). Conceptual integration network. *Cognitive Science*, 22, 133-187.

4. The Complexity of Coffee: A Cognitive Linguistic Perspective on Expressing Flavor in Mandarin Chinese

CHANG, Yi-Hsuan (National Taiwan University)

This study aims to explore how flavor is conceptualized cross-modally in perceptions via analyzing the Mandarin Chinese data collected from coffee cupping. Although coffee cupping involves abundant cross-modal expressions, previous studies are scarcely addressed on coffee but wine

tasting. To bridge this research gap, this study conducts a corpus-based investigation on cupping data involving 27043 words from a 10-hour recording. Based on previous flavor researches (e.g. Paradis, 2013), the study put emphasis on the following three aspects, property-driven, event-driven, and scenario-driven expressions. Besides, we discovered that property-driven expressions are actually synesthetic metonymization, event-driven expressions are synesthetic metaphors and cross-modal analogy, and scenario-driven expressions are synesthetic similes. More importantly, different from hypotheses of the previous researches, the study proposes a novel directionality of perceptual transferring in cross-modal interaction. By analyzing flavor expressions in coffee cupping, the study turns over a new leaf in analyzing the relation between language, cognition and perception.

References: (1) Williams, Joseph M. 1976. "Synaesthetic adjectives: A possible law of semantic change." *Language*. (2) Yu, Ning. 2003. "Synesthetic metaphor: A cognitive perspective." *Journal of literary semantics*. (3) Paradis, Carita, & Eeg-Olofsson, Mats. 2013. "Describing sensory experience: The genre of wine reviews." *Metaphor and Symbol*.

ポスター発表1 / Poster Presentations 1 (11:50~12:50)

ポスター発表会場 [1階 A103]

A1. イディオム構文の語用論的な効果について — 「NひとつVない構文」を一例にして—
OH, YoungMin (関西大学大学院)

本発表の目的は、イディオム的な構文(Croft and Cruse 2004, Fillmore et al. 1988)の語用論的な効果とはどのようなものなのかを、日本語の「NひとつVない構文」(以下、ひとつ構文)を取り上げ、考察することである。具体的には、現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ-NT)から収集されたひとつ構文の用例 648 件をもって坂本 (2001)、鍋島(2003)、澤田 (2005) といった先行研究の主張を検証する。また、ひとつ構文の構成要素の意味だけでは、構文全体の語用論的機能及び効果を示せないことを明らかにする。

参考文献：(1) Kay, P. and Fillmore, C. J. 1999. Grammatical constructions and linguistic generalizations: The What's X doing Y? Construction. *Language*, 75, 1-33. (2) 鍋島弘治朗. 2003. 「「……ひとつ……ない」構文について—日本語における構文文法研究の一例として—」『日本語文法学会第4回大会発表論文集』, 83-92.

A2. What Sentence-final Particle *Ne* Does in Imperatives

IHARA, Shun (Osaka University)

The aim of this work is to explore the relation between imperatives and the Japanese sentence-final particle (SFP) "ne" in a dynamic pragmatics approach. It is widely known that ne can attach to a te-imperative. However, it is infelicitous to use ne in pressing or urgent situations:

(1) (Jiro has dropped his pencil under Taro's desk.)

Taro, empitsu tot-te-#ne!

'Taro, pick up my pencil (right now) #ne!'

Chen[1] and other scholars argue that ne serves a function of confirmation and weakens the strength of imperative force. I agree with this view, but the meaning of confirmation in imperatives has not been specifically described so far and the constraint on the occurrence of ne in imperatives remains unclear. My proposal is based on the slightly modified version of Portner[2]'s To-Do List (TDL) model. It shows that ne plays the role of restricting the domain of TDL-updating function of imperatives.

References: [1] Chen, C.-H. 1987. "Shūjoshi -Hanashite to Kikite no Ninshiki no Gyappu wo Umerutame no Bunsetsuji-." *Nihongogaku* 6:10, 93-109. Meiji Shoin. [2] Portner, P. 2007. "Imperatives and Modals." *Natural Language Semantics* 15:4, 351-383.

A3. 不満表現の定量的分析の試み

李 在鎬 (早稲田大学), 伊藤 奈津美 (早稲田大学),
岩下 智彦 (早稲田大学), 久保 圭 (大阪大学),
小西 円 (国立国語研究所), 尹 智鉉 (早稲田大学)

本研究グループでは、国立情報学研究所が提供する生の言語データ「不満調査データセット」を利用し、不満表現における不満度を人手によってコーディングした上で、言語的要素や発話行為の使用文脈的要素を考慮し、分析を行った。分析の結果、受け身や使役形などの構文的条件、程度副詞や不満形容詞などの語彙的条件、軽蔑表現の含有、改善要求構文の含有については、有意な差は確認されなかった。一方、モーダル表現の含有に関しては有意な差が確認された ($\chi^2=7.134$, $df=2$, $p=.028$)。次に、発話文脈に関する特徴として、不満の相手と不満対象の意味クラスにおいて有意差が見られた (相手: $\chi^2=25.675$, $df=6$, $p=.000$), 不満対象の意味クラス: $\chi^2=20.881$, $df=10$, $p=.022$)。

A4. 二人称対称人称詞の呼びかけ語 一重ね用法に着目して一

東出 朋 (九州大学大学院)

本発表の主眼は、呼びかけ語の重ね用法(「お父さんあんた、ゴミ出してきてよ」における「お父さんあんた」)の統語的及び意味的特徴を記述し、日本語教育において特に問題とされている二人称対称人称詞の有標な使用の様相を解明することである。東出(2016)は重ね用法が出現する条件の一つとして、一番目の対称詞は呼びかけ語として解釈されるが、二番目の対称詞は純粋な呼びかけ語ではなく文の項として後続する述部により強く関係づけられると指摘した。本稿の分析結果として、①文頭付近でしか用いられず、②二人称対称人称詞を格関係に還元すると主格になることが圧倒的に多いが、③ハヤガを還元することは困難であり、④これらはいずれも働きかけや問いかけのモダリティの文に頻繁に観察された。これらの結果について、句読点やイントネーションと関連付けながら考察する。参考文献:(1)東出朋. 2016. 「呼びかけ語の二人称対称人称詞—談話における特殊な機能—」言語文化論究 37.

A5. 大学生を対象とした日本語のほめの使用調査

藤村 ウィルソン 香予 (山口大学)

会話におけるほめは発話行為のひとつとして、話し手が聞き手に対してその人の持ち物や性格、技能を積極的に評価し表すときに使われる (Holmes, 1986) と定義付けられ、多くの言語で語彙の使用やその目的、応答とともに研究されてきた。

本研究は日本人大学生におけるほめの使用を、ノート形式によるデータと質問用紙による意識調査によって分析し考察したものである。結果においては、日本人大学生のほめは日常的に使われ、ある技能にすぐれ何かを成し遂げたときに使われるものが多く、これまでの研究結果と類似していた。また、大学生のほめの使用場面はサークルの上下関係における使用を含め身近な人との間での使用が多かった。被験者の多くは、ほめの使用は会話を盛り上げ継続させるために必要であると考えており、素直な驚きや尊敬の気持ちを表すために使用していた。応答においても謙遜するより素直に感謝を述べるという意見が多かった。

参考文献:(1) Holmes, Janet. 1986. "Compliments and Compliment Responses." *Anthropological Linguistics* 28. 485-508. (2) Tsuda, Sanae. 1992. "Contrasting Attitudes in Compliments: Humility

in Japanese and Hyperbole in English.” *Intercultural Communication Studies* 2 (1). 137-146.

A6. ポライトネス・ストラテジーにおける「ケド言いさし文」の位置づけに関する調査： 日中対照の視点から

燕 興 (千葉大学大学院)

日本語母語話者は、日常会話においてしばしば接続助詞「ケド」で言い終わる文（「ケド言いさし文」）を使う。例えば、「会議がもう始まるそうですけど」（白川 2009）などである。しかし、日本語母語話者に相当する言語背景を備えていない外国人日本語学習者にとって、「ケド言いさし文」を適切に使用するのは困難である。

人間関係や社会的要因との関連から会話参加者の言語的配慮を考察する理論として、Brown & Levinson(1987)が提唱したポライトネス理論がある。本研究は、ポライトネス理論でいう D・P・R 変数を操作した場面でアンケートを行い、「ケド言いさし文」がポライトネス・ストラテジーでの位置づけに対する日中の認識差異を明らかにする。

参考文献：(1) Brown, P., & Levinson, S. C. (1987). *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge, UK: Cambridge University Press. (2) 白川博(2009). 『言いさし文の研究』, くろしお出版.

A7. 他者の発話を理解することの生態学的価値を考慮した発話理解モデルの提案

高梨 克也 (京都大学)

従来の語用論理論では、聞き手が話し手の発話を理解することの動機が存在は自明とみなされているのに対して、本発表では、発話理解を聞き手となる主体の環境内での情報行動の一つであると考え、より広範な生態学的観点からの理論的検討を行う。具体的には、「主体 B が他の主体 A の観察可能な振る舞いなどから、A の認知状態についての情報を獲得することを通じて、環境についての情報を間接的に獲得し、自身の行動に利用する」という、「他者の認知の利用」（高梨 2010）という現象に着目することによって、話し手の発話を聞き手が理解することの持つ、聞き手自身にとっての環境適応上の生態学的価値という視点を導入し、この視点から、関連性理論（スペルベル& ウイルソン 1999）における、伝達原理と認知原理という 2 つの仮定を批判的に再検討することを通じて、生態学的に健全な新たな理論的提案を行う。

参考文献：(1) スペルベル, D. & ウイルソン, D. (1999) 『関連性理論：伝達と認知（第 2 版）』（内田聖二他（訳）、研究社出版）、(2) 高梨克也(2010) 「インタラクションにおける偶有性と接続」、木村大治・中村美知夫・高梨克也（編著）『インタラクションの境界と接続』, 昭和堂, 39-68.

研究発表 1 / Oral Presentations 1 (13:20~15:15) B 会場 [2 階 A201]

1. やめとけ！：マンガにおける独話に見られる命令表現の対話性

ジャンカーラ・ウンサーシュッツ (立正大学)

内面的なことばが対話的とされる要素を含んでいることがあるが (Hasegawa 2010)、その対話性の有り方について不明な点が未だに多い。本研究では、マンガのコーパスを活用し、定義上他者の行動を制限する役割がある命令表現に着目することにより、内面的なことばにおける対面性を再考する。調査にあたり、内面的なことばにおける命令表現を抽出し、誰に向けているのかによって分類を行った。分析の結果、内面的なことばにおいても約 50 ページに 1 度という頻度で命令表現が出現することが確認できた。そのうち、約 2 対 1 の

割合で思考者以外の他者に向けたものがより多く、大半が Short & Leech (2007) の概説した一時的停止中対話 (suspended interaction) に相当するものである。だが、より珍しいとはいえ、内面的なことばに見られる命令表現がすべて仮にでも相手を立てて発されているものではないことも示されており、内面的なことばに見られる対話性を理解するのに役立つと考えられる。

参考文献：(1) Hasegawa, Yoko. 2010. "The sentence final particles *ne* and *yo* in soliloquial Japanese." *International Pragmatics Association* 20. 71-89. (2) Short, Michael, & Geoffrey Leech. 2007. *Style in Fiction: A Linguistic Introduction to English Fictional Prose*. Harlow, UK: Pearson Education Limited.

2. 雑談はなぜ雑談なのか：雑談を特徴づけるコミュニケーション的要因の探索的検討

臼田 泰如 (国立国語研究所)

本研究は、「雑談」と呼ばれるタイプの会話が、参加者にとって（同時にそれは分析者にとっても）「雑談である」として理解可能なのはなぜか、ということについて検討を試みる。これまでの会話の研究において、上記のような特徴にあてはまる雑談的会話は、会話を研究する上での主要なデータとして広く用いられてきた。しかしながら、雑談をひとつのタイプとの、固有の論理や構造をもった活動であると考え、その活動としての理解可能性を考察した研究は多くはなされていない。本研究では、雑談として理解可能な会話が、どのような特徴によって雑談として理解可能になっているのか、を探索的に検討する。そのため、雑談からある程度制度性をもった会話へと移行する過程におけるプロセスを分析する。単に雑談がなされている場面の分析をするより、雑談、制度的会話、そしてその間の移行区間を対比的に扱うことで、雑談の様相を検討しやすいと考えられるためである。

参考文献：(1) Drew, P. & Heritage, J. 1992. *Talk at Work: Interaction in Institutional Settings*. Amsterdam: John Benjamins. (2) 村田和代, 井出里咲子. 2015. 『雑談の美学：言語研究からの再考』東京：ひつじ書房. (3) 筒井佐代. 2012. 『雑談の構造分析』東京：くろしお出版.

3. 日本語におけるプレースホルダ「あれ」：文法と談話の接点

瀬楽 亨 (韓国外国語大学校), 坂口 清香 (韓国外国語大学校), 朴 敏瑛 (韓国外国語大学校)

近年<プレースホルダ>の通言語的研究が盛んである(Hayashi and Yoon 2006, Amiridze and Maclagan 2010)。日本語では「あれ」にプレースホルダ機能があり、会話分析の観点から研究されてきた(Hayashi 2003)。本稿では、先行研究では十分に議論されていない以下の二点を主張し、『日本語話し言葉コーパス』などのデータをもとに例示する。[主張 1] 指示語「あれ」とプレースホルダ「あれ」は、<指示対象, 修飾方法, 指示・疑問語の付加, 否定辞との共起>などの点で共通点と相違点が観察される。特に相違点に関しては、プレースホルダ「あれ」が独自に獲得した文法的性質であると考えられる。[主張 2] 先行研究では、<相互行為における認知的または社会的問題に対処する手段>としてプレースホルダが捉えられている。本稿では、<問題に対処する手段>という捉え方に加えて、<対人・修辞効果を狙う方略>としてプレースホルダが使用されることを指摘する。

参考文献：(1) Amiridze, D. and Maclagan, M. (eds.) 2010. *Fillers, Pauses and Placeholders*. Amsterdam. (2) Hayashi, M. 2003. *Joint Utterance Construction in Japanese Conversation*. Amsterdam. (3) Hayashi, M. and Yoon, K. 2006. "A Cross-linguistic Exploration of Demonstratives in Interaction." *Studies in Language* 30. 485-540.

研究発表 2/ Oral Presentations 2 (13:20~15:15) C 会場 [2 階 A202]

1. 談話連結語〈ただし〉と〈ただ〉の意味論と語用論

武内 道子 (神奈川大学)

認知語用論は伝達される内容の一部に命題表示態度を含み、高次表意として関連性を達成すると記述される。本発表は命題態度を表明する〈ただし〉と〈ただ〉の意味論と、先行発話の解釈が〈ただし／ただ発話〉の解釈への制約を課するという両連結語の語用論を提示する。共通の意味論は、〈ただし／ただ発話〉が先行発話に内在するネガティブな情報・コメントであることを指示する意味を有する。これを私は「調整」(tuning)機能とよび、両語を tuning indicator とよぶ。次に違いとして、「P. ただし／ただ Q。」のスキーマにおいて、〈ただし〉の使用は、P と Q 事象間の関係で働き、一方、〈ただ〉は事象と発話ないし思考との間で働く。最後に関連性理論の意味論において、〈ただし〉の意味は概念的・表示的であり、対照的に、〈ただ〉は概念を持たず、解釈の方向を指示するポインターの意味を有すると分析する。

参考文献：(1) Corrine Iten. 2005. *Linguistic Meaning, Truth Conditions and Relevance: The Case of Concessives*. Palgrave, Macmillan. (2) Wilson, D. 2011. *Modality and Conceptual-Procedural Distinction*. 武内道子・佐藤裕美 (編著)『発話と文のモダリティ 対照研究の視点から』神奈川大学言語学叢書 1. 1-20, 東京：ひつじ書房。

2. なぜ「んだ」は対照的な発話意図を示しうるのか？ -文末音調の違いに注目して-

市村 葉子 (名古屋大学)

説明のムード形式ノダの実現形「んだ」は情報提示と情報受容という対照的な発話意図を伝達する。本研究は話し言葉 (音声言語) に注目し、日本語母語話者 60 名に対する聴取実験を基に、当該形式の文末音調が聞き手の発話解釈にかかる処理コストを軽減していることを明らかにした。具体的には、「だ」の主要な音調は 2 つであり、アクセント上昇調の場合は情報伝達、下降調の場合は情報受容と解釈される傾向にあることがわかった。話し言葉において、「んだ」は主に情報を受容する場面で使用されているが、情報伝達場面でも使用がみられ、その場合には上昇調が選好されると考えられる。それは、意図的に上昇調を用いることで、聞き手目当て性及び聞き手配慮を明示することが可能になるためである。音調が手続きの意味を持つという考えを援用することにより、対照的な発話意図を一つの形式が担うことも説明可能となる。

参考文献：(1) 石黒圭.2003. 「「のだ」の中核的機能と派生的機能」、『一橋大学留学生センター紀要』、6、3-26、一橋大学留学生センター。郡史郎.2003. 「イントネーション」、上野善道 (編)『朝倉日本語講座 3 音声・音韻』、109-131、東京：朝倉書店。

3. 会議における「ね」の文末イントネーションの使用と話者の発話意図

阿部 あかり (日本女子大学大学院)

本発表の目的は、模擬会議における終助詞「ね」の使用とそのイントネーションの型を分析することで、話者がどのような意図をもってコミュニケーションを行っているのかを探ることである。イントネーションの型の判別は、音響分析ソフト Praat で計測した波形に基づき、主に大島 (2013) と伊豆原 (1994) を参考にして行った。会話参加者の発話とそれに伴う各イントネーションを観察することで、会議場面における話者の発話意図を考察する。また、話者は意識的あるいは無意識的にイントネーションを使い分けることで、円滑

なコミュニケーションを図っているという点を明らかにする。

参考文献：(1) 大島ディヴィット義和. 2013. 「日本語におけるイントネーション型と終助詞機能の相関について」、『国際開発研究フォーラム』、43、47-62. (2) 伊豆原英子. 1994. 「感動詞・間投助詞・終助詞「ね・ねえ」のイントネーション-談話進行との関わりから-」、『日本語教育』83、96-107.

研究発表 3/ Oral Presentations 3 (13:20~15:15) D 会場 [2 階 A203]

1. A Critical Discourse Analysis on radio programs during the occupation period of Japan: The link between their discourse structures and GHQ's occupational ideologies

OTA, Nanako (The University of Tokyo Graduate School of Arts and Sciences)
The present study analyzes historical primary sources, which have been paid little attention in Critical Discourse Analysis (CDA) as data, and aims to elucidate how language and ideology are mutually constitutive. Specifically, this study explores the discourse structures of radio programs broadcast right after WWII – Shinsou ha Kouda and Shitsumon Bako – made under GHQ's orders and instructions. I conclude that the change of discourse structures from the former program to the latter echoes GHQ's occupation policy change from the inculcation of anti-militarism to the dissemination of democracy. This study may suggest the potential of CDA on historical primary sources to reveal how ideology at the time imbued discourse and in turn to investigate what ideology existed through analyzing discourse.

References: (1) Wodak, R. 2001. The discourse-historical approach. in Wodak, R. & Meyer, M. (Eds.). *Methods of Critical Discourse Analysis*. pp. 95-120. London: Sage. (2) 名嶋義直. 2015. 特定秘密保護法に関する記者会見記事の批判的談話分析—トピック・連鎖・構造を中心に. 加藤重広 (編). 『日本語語用論フォーラム 1』 ひつじ書房.

2. TED Talks における「論旨の役割」と「話し手の意図」の日英語比較研究

櫻田 怜佳 (日本女子大学大学院)

本研究は、日本語母語話者と英語母語話者の行うパブリック・スピーチ (TED Talks) において、スピーチの中心となる「論旨」がどのようなプロセスで導かれているか、また、論旨を述べる際にどのような言語表現が用いられているかを比較分析することによって、日英語それぞれのスピーチにおける「論旨が担う役割」を明らかにするものである。さらに、その相違の背景にある要因として、スピーチに対する「話し手の意図」が文化によって異なることを考察する。日英語の文章構成や表現の相違は、文学作品や論文など書き言葉をデータとして扱った対照レトリック研究の分野で指摘され、各言語文化によって「思考のパターン」が異なることが主張されている (Kaplan 1966, 本名 1989)。本研究では、話し言葉であるパブリック・スピーチの中に見られることばの使用を語用論的観点から分析し、特に「論旨」の示し方を見ることによって、日英語のスピーチの在り方を考察する。

参考文献：(1) 本名信行. 1989. 「日本語の文体と英語の文体」. 『講座 日本語と日本語教育』. 第 5 巻: 明治書院. (2) Kaplan, Robert. 1966. "Cultural Thought Patterns in Intercultural Education." *Language Learning* 16: 14. 1-20.

3. 人種差別用語 Jap(s) の意味と解釈

藤本 大樹 (名古屋大学大学院)

英語の *Jap(s)* という語は、現在でも政治的に不適切な語であると一般的に認識されてい

る。本研究の目的は、戦時中の *Jap* の使用を分析することによって、このような認識を支える源泉とは何かを考察することにある。Hedger (2013) は、人種的蔑称の攻撃性は慣習的意味によるものであり、語用論の問題ではなく意味論の問題であると述べている。しかし、*Jap* が本来 *Japanese* の省略語として使用されていたという事実は注目に値する。Hedger (2013) の分析では、語の本来の意味において *Jap* が慣習的に省略語を意味するのに対し、意味の悪化によって、不快な語だと認識されるようになったのはなぜか、ということの説明できない。本発表では、次の2点に着目する。ひとつは、ヤコブソン流の詩的機能とプロパガンダの関係、もう一方は日本人を指示するための英語の曖昧性と語用論的推論の必要性(e.g. the Japanese, Japanese people, Jap) である。

参考文献:(1) Hedger, J. A. 2013. "Meaning and racial slurs: Derogatory epithets and the semantics/pragmatics interface." *Language & Communication*, 33:3, 205-213. (2) Fussell, P. 1989. *Wartime: understanding and behavior in the Second World War*. Oxford: Oxford University Press.

研究発表 4/ Oral Presentations 4 (13:20~15:15) E会場 [2階 A204]

1. 同時と因果と譲歩：語用論的強化と意味(含意)の読み込み

花崎 美紀 (信州大学), 花崎 一夫 (信州大学)

一般的に「機能語」と呼ばれる語の多義は、認知言語学の台頭以前は扱われることが少なかったが、Lakoff (1987), Brugman (1981)以降研究が進められ、その理論の下では、語にプロトタイプカルな中心義を設定し、他の意味は、その中心義からの派生義として、家族的類似 (Wittgenstein 1953) を元に semantic network を構成すると説明されることが多い。しかし、このような説明の仕方は多くの問題点を含む。

本発表では、発表者がこれまでの研究で扱ってきた *as* を、同じような意味を持つ、前置詞 *with* をはじめとする他の前置詞や、*and* などの接続詞、そして分詞構文と比較し、それらの言語形式において、家族的類似を設定できない事実を提示した上で、含意の読み込みがどのように行われ、語用論的強化が、多義にどのように関わっているかについて考察する。

(1)Brugman,C.(1981) *Story of Over*. master thesis, Berkeley, California. (2) Lakoff, G. (1987) *Women, Fire and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. University of Chicago Press. (3) Wittgenstein, R. (1953) *Philosophical Investigations*. Blackwell.

2. 統語的曖昧表現を伝達する際の話者の焦点 文法構造とジェスチャーの関係性

岡久 太郎 (京都大学大学院)

本研究では、「白いカーテンの留め具」のような統語的曖昧表現がジェスチャーを伴って発話される時、文法構造の違いがジェスチャーによってどのように区別されるかを調査した。これまで、統語的曖昧表現を言い分ける際の音声的差異に関する研究は存在したが、マルチモダリティの観点から統語的曖昧表現の言い分けについては研究されていない。そこで、本研究では発話にジェスチャーを付けて統語構造を明瞭化させる課題を12名の日本語母語話者に対して行った。調査の結果、統語構造において各階層の主要部となる名詞がジェスチャーとして現れることが多かった一方で、発話の線的順序とジェスチャー実行のタイミングを対応させ、意図する文法構造を伝えようとする発話も観察された。この事実は、統語的曖昧性を解消しようとする時の話者の焦点の置き方が、言語の階層性に基づく場合と線条性に基づく場合とがあることを示唆している。

参考文献:(1) 広瀬友紀. 2006. 「話者の意図と聞き手の理解: 語彙アクセントの隠れた作用」. 『認知科学』13: 3. 428-442. (2) Steen, Francis, and Mark B Turner. 2013. *Multimodal Construction*

Grammar. In Borkent, Michael, Barbara Dancygier, and Jennifer Hinnell (eds.), *Language and the Creative Mind*. : 255–274. Stanford and CA: CSLI Publications/ University of Chicago Press.

3. とりたて詞「も」の繰り上げ現象に関する分析

稲吉 真子 (北海道大学大学院)

本発表では、「も」の使用における後接位置の選好性(preference)について考察する。例えば「時間も遅いから帰ろうか。」では、時間の他に遅い物事があるわけではなく、実際に想定されているのは、「時間が遅いこともある」に類似する「帰るべき理由」である。つまり、意味上では命題(節)をとりたてているのに対し、形式上は語句に「も」が後接するという点で齟齬が生じている。これを線条性による解釈処理の負担との関わりから考察する。加藤(2006:9)では、言語は処理の際、即時性の原則(immediacy principle)を有するとされており、文意味の決定の遅れは、解釈の負担増加を意味する。また、後接する位置に関係なく同義に解釈できる場合、聞き手の注意を絞るため、焦点の短いものが選好されやすい。加えて、動詞に後接する場合は、活用に際する形態変化も負担要素の一つとなる。以上の3点を軸に実例を検証する。

参考文献：(1) 青柳宏. 2006. 『日本語の助詞と機能範疇』. 東京：ひつじ書房. (2) 加藤重広. 2006. 「線条性の再検討」、峰岸真琴(編)『言語基礎論の構築へ向けて』、1-25、東京外大 AA 研. (3) 沼田善子・徐建敏. 1995. 「とりたて詞「も」のフォーカスとスコープ」、益岡ほか(編)『日本語の主語と取り立て』、175-207、東京：くろしお出版.

研究発表 5/ Oral Presentations 5 (13:20~15:15) F 会場 [2 階 A205]

1. *respecting* の文法化と(間)主観化：歴史語用論のアプローチ

林 智昭 (日本学術振興会/京都大学)

本発表の主眼は、Oxford English Dictionary のデータにより動詞派生前置詞 *respecting* の事例研究を行い、その通時的な文法化プロセスを示し、(間)主観化 (Traugott 2011) がみられる事例だと指摘するところにある。18 世紀以降、主節・分詞節の主語が一致しない、いわゆる懸垂分詞的な事例が増加するが、ここでは *respecting* が導く分詞節の内容は話者の判断を示しており、主観化がみられる。その後、さらに文法化が進み、意味の漂白化が起き「関連」の意味となった事例が観察されるようになる。ここでは話し手の主観的な判断は捨象されており、間主観化が進んだと考えられる。この用法は文法化の後期にあり、前置詞化が進んだものと考えられるが、1971 年を最後に観察されなくなる。重要であるのは、*respecting* における(間)主観化のプロセスは文法化に伴うという点である。

参考文献：(1) 秋元実治. 2014. 『増補 文法化とイディオム化』 (2) 早瀬尚子. 2009. 「懸垂分詞構文を動機づける『内』の視点」、坪本篤朗・早瀬尚子・和田尚明(編)『「内」と「外」の言語学』55-97. (3) Traugott, E.C. 2011. 「文法化と(間)主観化」、高田博行・椎名美智・小野寺典子(編)『歴史語用論の入門：過去のコミュニケーションを復元することばと視点』59-70. 東京.

2. 福岡県久留米市方言終助詞「タイ」とエビデンシャル 一文末詞ダ・ノダとの関係を通して

春日 悠生 (京都大学大学院)

九州北部の肥筑方言域で使用される終助詞「タイ」は、共通語ではおよそダ・ノダに相当する意味を持つ。本発表では、終助詞「タイ」が、実際にはタイとトタイ(トは準体助

詞) という 2 つの形式に分化して使用されていることを示し、そしてそれらの使い分けには、「接続する文で示される情報を話し手がどこから得たか」というエビデンシャルが関わることを主張する。具体的には、終助詞タイは「接続する文の情報が話し手の責任によって得られたものである」というエビデンシャルを表し、トタイは、「接続する文の情報が話し手の責任によらずに得られたものである」というエビデンシャルを表す。また、共通語のダ・ノダと方言終助詞「タイ」との類似から、共通語のノダにもエビデンシャル的側面があることを指摘する。本発表は、準体助詞のエビデンシャル的な機能を指摘し、方言研究から得られる知見が、共通語のダ・ノダ研究にも貢献できることを示すものである。

主要参考文献: (1) 井上優. 2006. 「モダリティ」, 小林隆 (編) 『方言の文法』137-178. 東京: 岩波書店. (2) 坪内佐智世. 1995. 「福岡市博多方言の不変化詞タイ・バイの意味記述」『九州大学言語学研究室報告』16: 75-104.

3. 「寒いシ。」の「シ」の機能 — 「寒いつて。」との比較を含めて

大山 隆子 (北海道大学)

接続助詞「し」はこれまで「あの店は安いし、おいしいし、きれいだ。」のように複文で並列的に述べる用法が規範であったが、最近、若者を中心に「寒いシ。」のような従属節のみで終わる形式での使用が見られる。これらの文法的制約の変化が語用論的機能に関わるものとみて分析する。また出現位置が「シ」と似ており、範列関係にある終助詞「つて」を比較し、これらが談話の解釈にどのような効果をもたらしているのか、談話文法の枠組みも踏まえ考察する。結果、話し手は「寒いシ。」であえて打ち止めているが、並列の本来の用法から、潜在的な他の根拠も持ち得ると言える。後は聞き手の推論に委ねる話し手の効果的な戦略とも考えられる。また、「シ」と「つて」は「話し手の伝達上の態度を表す談話標識」の機能を持ち、ともに「反論」などに使用できる。「シ」と「つて」はもともと異なるものであったが長い運用の中で似た効果を示すようになったと考えられる。

参考文献: (1)加藤重広.2014.「日本語の語用特性と複文の単文化」益岡隆志他(編)『日本語複文構文の研究』東京(2)白川博之.2009.『「言いさし文」の研究』東京(3)Evans, Nichols 2007 “Insubordination and its uses” Irena Nikolaeva (ed.) *Finiteness: Theoretical and empirical foundation*, Oxford: Oxford University Press, 366-431

シンポジウム / Symposium (15:25~17:55) A会場 [1階 A101]

● 認知言語学と語用論は文化差をどのように捉えるか? /How do pragmatics and cognitive linguistics approach

Chair: KITANO, Hiroaki (Aichi University of Education)

Discussant: SENFT, Gunter (Max Planck Institute for Psycholinguistics)

◆ How culture affects children's use of social and pragmatic cue in their inference of word meanings

IMAI, Mutsumi (Keio University)

◆ Conversation analysis and cross-linguistic/cross-cultural comparison

HAYASHI, Makoto (Nagoya University)

◆ Guard our hearts with love: The study of Chinese characters with the "heart" radical and its cultural implications

CHIANG, Wen-yu (National Taiwan University)

研究発表 6/ Oral Presentations 6 (9:30~11:25) B 会場 [2 階 A201]

1. 発話行為の「名前」による概念の形成を探る — 「脅迫する」「おどす」「おどかす」の成立条件の比較を参考に

池邊 瑞和 (最高裁判所司法研修所), 首藤 佐智子 (早稲田大学)

発話行為理論 (Austin 1962、Searle 1969)が成立条件を用いて示したことは発話行為動詞の意味の記述にすぎないという批判が存在するが、本研究は、指示対象が近似する発話行為動詞(「脅迫する」「おどす」等)の使用上の制約を考察することによって、各動詞の意味と発話行為の成立条件が必ずしも一致しないことを示す。発話行為の成立条件とされているものは、告知される事実や受話者の認識に関する発話行為者の認識に対する制約である。一方、発話行為動詞の使用上の制約には行為に対する表現使用者の評価に関するものも存在する。これらの条件・制約は個々の動詞によって少しずつ異なり、発話行為の名称となる既存の動詞の存在が発話行為の概念に大きく影響を与えている可能性を示唆する。同時に、発話行為を成立条件によって説明するというアプローチの妥当性を支持するものである。各動詞の制約を同定するにあたっては、他表現への読替えの可否を考査した。

参考文献: (1)Austin, J. 1962. *How to do things with words*. Oxford: Oxford University Press. (2)Searle, J. 1969. *Speech acts: an essay in the philosophy of language*. Cambridge: Cambridge University Press.

2. 「断り」のストラテジー日英比較研究 — 多国籍企業で働く会社員のスピーチ・アクトを中心に —

四谷 晴子 (法政大学大学院)

本研究の目的は、日本人会社員 (JS) と欧米人会社員 (ES) がどのような「断り」のストラテジーを使用するのかを、Brown & Levinson のポライトネス理論 (1987)を使って、分析し、類似点と相違点を明らかにすることである。先ず、ビジネス・コミュニケーションに必要な意味公式 (SF) を再検討し、発話内の SF 出現頻度を中心に量的分析を実施した。使用された SF から「断り」の構成要素を探り、それらに社内の人間関係がどのような影響を与えるかの検証を行った。その結果、「断り」のスピーチ・アクトには一定のシークエンスがあること、発話の構成要素とシークエンスには JS・ES の間に相違点と類似点があることが明らかになった。相違点は、ビジネス・コミュニケーションにおける摩擦や誤解の原因であると同時に、問題解決のヒントとも考えることができる。

参考文献: (1)Beebe et al. (1990) *Pragmatic Transfer in ESL Refusals. Developing Communicative Competence in Second Language*, MA: Newbury House Publishers (2) Brown & Levinson (1987) 田中典子監訳『ポライトネス—言語使用における、ある普遍現象—』東京: 研究社

Friction and communication gaps often arise at multinational work places. The aim of my research is comparison and analysis of the speech acts of Japanese speakers (JS) and English speakers (ES) that occur at multinational companies in Japan. To clarify how they avoid friction in establishing favorable relations and how communication gaps arise is a key to solving these issues. I set up a new Semantic Formula focused on business communication referring to Beebe et al. (1990) and Meng (2010). Data of speech acts are quantitatively analyzed based on frequency of SF used, clarifying the fact that there is a certain sequence in refusal discourse. There are, however, differences of elements and sequence between JS and ES. These differences may be thought to be causes of friction and communication gaps. They also provide us with hints for reducing problems in business communication.

References: (1) Beebe et al. (1990) *Pragmatic Transfer in ESL Refusals. Developing Communicative*

Competence in Second Language, MA: Newbury House Publishers. (2) Brown, P & S. C. Levinson (1987) *Politeness; Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.

3. 「ママ友」間の対立分析 —フェイスワークとイン/ポライトネスの観点から—

大塚 生子 (大阪工業大学)

本研究は、いわゆる「ママ友」間で実際に起こった対立場面におけるフェイスワークを、イン/ポライトネスの観点から考察するものである。ポライトネス研究は従来、「ポライト」という語の意味に引きずられるように「円滑なコミュニケーション」を前提として行われてきた。しかし本研究では、これまで見過ごされがちであった話し手の自己フェイス保持欲求という視点により、彼女らの対立場面における権力闘争を、談話分析を通して考察する。これを通して、いわゆる「ポライトネス・ストラテジー」が自己の利益に関連して使用されていることを明らかにし、最終的にこれまでのポライトネス研究の根本を問うことを試みたい。

参考文献：(1) Brown, P. and Levinson, S. C. 1987. *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge University Press. (2) Goffman, E. 1967. “Interaction Ritual.” *Pantheon*. (3) 大塚生子. 2014. 「夫婦間会話における自己フェイス補償ストラテジー:(イン)ポライトネスの観点から」. 『言語文化学』. Vol. 23, 31-43.

研究発表 7 / Oral Presentations 7 (9:30~11:25) C 会場 [2 階 A202]

1. How the Japanese *-te aru* maps out its event construal

KIM, Yong-Taek (Indiana University of Pennsylvania),
IZUTSU, Katsunobu (Hokkaido University of Education)

This study provides an extended semantic map model of major senses of the Japanese V-te aru construction, thereby proposing a useful analytical tool for elucidating the interrelation between event construal and its linguistic representation in general. The prototypical meaning of the construction is ‘THE SITUATION AT THE REFERENCE SCENE HAS BEEN INFLUENCED BY A PREVIOUS ACTIVITY’; the major senses differ in the event construal that underlies each sense. Event construal comprises two major facets of attention: “focus” and “windowing” of attention; these are used to define the X/Y-axes of our semantic map. A survey of KOTONOHA corpus shows that the construction with a nominative-marked theme NP is more likely used when the speaker does not know or want to specify the agent of the previous activity, whereas the construction with an accusative-marked theme NP is, when the speaker is the agent or does know who it is.

References: (1) Masuoka, T. 1987. *Meidai no Bunpo – Nihongo Bunpoo Zyosetu* [Propositional Grammar – A Preface to Japanese Grammar]. Tokyo: Kurosio Publishers. (2) Teramura, H. 1984. *Nihongo No Syntakusu to Imi*. [The Syntax and Semantics of Japanese]. Tokyo: Kurosio Syuppan. (3) Kim, Y. 2009. *Event construal and its linguistic encoding: Towards an extended semantic map model*. Ph.D. dissertation. University of Oregon.

3. *have it that* 構文および *have it PP that* 構文の認知文法的分析

河野 亘 (京都大学非常勤)

本発表は、英語の *have it that* 構文および *have it PP that* 構文 (PP: 前置詞句) を対象として、認知文法 (Langacker 2009) の観点から意味論的・語用論的差異の記述・説明を試みるものである。2 構文は伝聞情報に関わる証拠性構文といえるが、命題の情報源として言語化される名詞句の特性や、話し手の情報に対するスタンスの一般的傾向に関して明確な相違がみられる。本発表では、認知文法における参照点構造や非人称の *it* の分析に基づき、2

構文の参照点構造を基盤とする概念構造を明らかにした上で、上記の構文間の差異における観察的事実が認知構造から分析可能であることを示す。

(1) Langacker, Ronald W. 2009. *Investigations in Cognitive Grammar*. Berlin: Mouton de Gruyter.

研究発表 8/ Oral Presentations 8 (9:30~10:45) D 会場 [2 階 A203]

1. 「ザ」の働きについて — 百科事典的意味観からの考察 —

梶原 彩子 (名古屋大学大学院)

「さすが果汁 100% だけあって、ザ・トマト!」「口元に手を添えて…ザ・プリンセス」のような「ザ・名詞」は、「ザ」の後ろに来る名詞の百科事典的知識の一部が焦点化されており、意味的には、「～らしい」「～っぽい」に置き換えて解釈することができる文脈依存的な表現である。本発表では、「ザ」は、基本的にはカテゴリーの成員に対して使われ、後ろの名詞を「字義通りの意味」でなく「その語から想起される百科事典的意味」として読み手に解釈させるマーカーとして働くと考え、実例を考察する。そして、「ザ・名詞」には、①カテゴリーの成員に対して使い、そのカテゴリーの典型的な特徴を活性化させるタイプ、②カテゴリー内外の成員に対して使い、ステレオタイプを焦点化するタイプがあることを主張する。また、名詞自体の比喩的意味の定着度によっては、②のタイプにおいて、カテゴリー外の対象への使用が容認されることを指摘する。

参考文献: (1) 梶山洋介. 2010. 「百科事典的意味観」. 山梨正明他編. 『認知言語学論考』9, 1-37. ひつじ書房. (2) 梶山洋介. 2016. 「ステレオタイプの認知意味論」. 山梨正明他編. 『認知言語学論考』13, 71-105. ひつじ書房. (3) Taylor, John R. 1989/1995. *Linguistic Categorization: Prototypes in Linguistic Theory*. Oxford: Clarendon. 辻幸夫他訳. 2008. 『認知言語学のための 14 章』第三版. 紀伊國屋書店.

2. 書き言葉及び話し言葉の干渉に関する一考察 — 中高生の課題作文に見られる形式名詞「こと」を中心に —

河野 亜希子 (九州大学大学院)

本発表は、中高生の作文等に見られる「主述の不一致」の要因を分析したものである。主に国語教育の分野では、主部に留意させる、主述の照応に留意させるといった手法でその文型を導くことができるという指摘もあるが、「なぜそのような誤用が起こるのか」という考察については不足している。また、教科書の提示法からは学校文法が「書く」領域で活かされていないことも推察されることから、これらの誤用が単なる文法的なミスに依るものだとは言い切れないであろう。そこで、文法的な観点とは別に話し言葉と書き言葉の観点から分析・考察を試みた結果、中高生の書き言葉の大きな特徴として話し言葉の干渉を受けていることに加え、さらにそこに内包される問題点が明らかとなった。現行の学校文法の枠組の中でどのような視点を取り入れたら「書く」領域との有機的な結びつきが可能となるのかという点についても考察する。

参考文献: (1) 安部朋世・橋本修. 2014. 「いわゆるモナリザ文に対する国語教育学・国語学の共同のアプローチ」『全国大学国語教育学会発表要旨集』126, 273-276. (2) 西山佑司. 2003. 『日本語名詞句の意味論と語用論 — 指示的名詞句と非指示的名詞句 —』ひつじ書房. (3) 影山太郎. 2011. 「デキゴトの叙述とモノの叙述」『国語研プロジェクトレビュー』6, 17-25.

研究発表 9/ Oral Presentations 9 (9:30~11:25) E 会場 [2 階 A204]

1. 古英詩の‘flyting’に関する語用論的研究 — 控えめな表現と格言的表現の使用と機能 —

遠山 菊夫 (杏林大学)

‘Flyting’ とは、侮辱的な言辞を繰り出し非難の言葉を浴びせかけ、相手を打ち破ろうとする武人社会特有の熾烈な舌戦である。本発表は、‘flyting’ の実例を古英語の英雄叙事詩から取り上げ、宗教詩から引用した侮辱や非難の応酬の場面と対照し、特に、控えめな表現と格言的表現に注目して考察する。Grice (1989) および Brown and Levinson (19872) を援用して、こうした緩叙法 (litotes) や暗示引用 (allusion) の使用と機能を分析することで、遠回しの修辭的表現に痛烈な皮肉を込めて双方が丁々発止と渡り合う競技的な ‘flyting’ と、露骨な侮辱や非難のやり取りが身体的暴力の行使の準備段階だと解釈できるものとは、攻撃的発言の交換のあり方と意味が全く異なることを明らかにする。

参考文献：(1) Grice, Paul. 1989. *Studies in the Way of Words*. Cambridge, MA. (2) Brown, Penelope and Stephen C. Levinson. 19872. *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge. (3) Jucker, Andreas H. and Irma Taavitsainen. 2000. ‘Diachronic Speech Act Analysis: Insults from Flyting to Flaming.’ *Journal of Historical Pragmatics* 1:1. 67-95.

2. ジョークの攻撃性と人間関係性との相関を探る —米国ドラマの英語談話分析を通じて—

大竹 彩加 (東京大学大学院)

本発表ではジョークの持つ潜在的な攻撃性の度合いと、そのジョークを交わす人間同士の関係性の強弱との相関について、米国ドラマからの談話データを用いた分析による考察を提示する。分析対象としたジョークは相互作用的ユーモア (Interactional Humor, Brône 2008) であり、これは曖昧性を利用した表現であるのだが、その利用に際しての話し手側の意図性の有無と、その曖昧性の所在を軸として分類できるものである。意図性の伴うものを潜在的攻撃性が高く、意図性の伴わないものをそれよりも攻撃性が低いと仮定し、使用場面における人物同士の関係性の強弱との相関を探った。

参考文献：(1) Brône, G. 2008. “Hyper- and Misunderstanding in Interactional Humor.” *Journal of Pragmatics* 40, 2027-2061.

3. Building rapport and negotiating turns (or not) through backchannels

IKE, Saya (Sugiyama Jogakuen University),
MULDER Jean (University of Melbourne)

Based on Ike’s (2016) and Ike & Mulder’s (2016) framework for multimodal analysis of backchannel (BC) behaviour, this paper analyses functional phases in a BC sequence—a backchannel instance in which the listener’s backchannel is acknowledged by the primary speaker with another backchannel-like expression. In Japanese English (JE), extended BC sequences are frequently observed, often displaying three phases: acknowledgement of the BC, mutual rapport building, and negotiation of turn. In Australian English (AusE), however, BC sequences are less frequent and often consist of only an acknowledgement phase. Given the differences in BC styles, JE and AusE speakers may have different expectations of their interlocutor’s BC behaviour. Our analysis shows that JE and AusE speakers negotiate their differences in BC sequence expectations using a range of accommodation strategies. This paper provides further insight into the interactional functions of BC behaviour in intra- and inter-cultural settings.

References: (1) Ike, S. (2016). The Interactional Basis of Backchannel Behaviour in Japanese English. *Journal of Sugiyama Jogakuen University: Humanities* (47), 129-138. (2) Ike, S., & Mulder, J. (2016). Conceptualising Backchannel Behaviour in Japanese English and Australian English. *The 18th Annual conference of Pragmatic Society of Japan Proceedings*.

研究発表 10/ Oral Presentations 10 (9:30~11:25) F 会場 [2 階 A205]

1. 英語母語話者と日本語母語話者の初対面会話にみられる“Do you know ~?”：知識についての相互行為の分析

山本 綾 (昭和女子大学)

一般的に、会話を円滑に展開させるためには、会話の相手がある話題について何をどのくらい深く／広く知っているのかを把握する必要がある。会話参加者が互いの知識の状態について十分な情報を持っていない場合、いかにして相手の知識を確認しながら会話の本筋を進めていくのだろうか。

本研究では、知識の有無や程度を明示的に問う言語形式 *Do you know ~?* (以下、DYK-Q) の使用に着目し、日本語母語話者と英語母語話者のペアによる初対面会話 (約 18 時間分) を資料として、会話分析・談話分析の方法を用いて調査を行った。DYK-Q が用いられる頻度、位置、および前後のやりとりを検討した結果、参加者の双方が DYK-Q を用いて、自国や自文化に固有の物事について語ろうとする様子が繰り返し観察された。そうした事例に基づき、DYK-Q、すなわち知識をめぐる短いやりとりが、相互行為に与える影響について考察する。

参考文献：(1) Heritage, John. 2012. “Epistemics in Action: Action Formation and Territories of Knowledge.” *Research on Language and Social Interaction* 45(1), 1-29. (2) 城綾実・坊農真弓・高梨克也. 2015. 「科学館における『対話』の構築：相互行為分析から見た『知ってる?』の使用」. 『認知科学』22(1). 69-83.

2. 返答表現 *indeed* の語法と機能

山本 五郎 (広島大学)

話し言葉において対話者の発話を受けた際に用いられる英語の相槌表現や返答表現については、non-lexical な表現から lexical な表現まで様々な表現形式が取り上げられてきた。しかしながら先行研究では取り上げられてこなかった表現も少なくない。中でも、会話において返答表現として用いられる *indeed* については、その意味や語法に焦点を当てた研究はこれまで充分に行われておらず、代表的な ESL/EFL 用の辞書においてもその記述には差異が認められる。また、語法書でも返答表現としては扱われていないことが多く、例えば Biber et al. (1999) では最も使用頻度の高い態度 (stance) を示す副詞の 1 つとして *indeed* を挙げているものの、返答表現としての用法には言及していない。このような背景を踏まえ、本発表では、話し言葉で応答表現として用いられる *indeed* について主だった辞書や語法書の記述を概観した上で、コーパスとして WordbanksOnline を用い、その語法と機能を Tolins and Tree (2014) による proactive backchannelling theory に沿って分析する。

参考文献：(1) Biber, D., S. Johansson, G. Blundell, S. Conrad, and E. Finegan. 1999. *Longman Grammar of Spoken and Written English*. Essex: Pearson Education Limited. (2) Tolins, J. and J. E. F. Tree. 2014. “Addressee Backchannels Steer Narrative Development.” *Journal of Pragmatics*, 70, 152-164.

3. DM *so* の話題調整機能について

西川 眞由美 (摂南大学)

後続内容が先行内容の結果 (結論) であることを示すために用いられる DM *so* は、会話の開始や終了、話題の転換や展開、談話の総括など、談話の中で話題を調整する機能も持

っている(西川 2016)。しかしながら、そのように使用される DM *so* の場合、話し手と聞き手の間に何らかの合意形成が成立しているような状況で好んで使用され、合意が成立していない文脈では使用不可能である。

本発表では、映画の台本や小説の会話の例を詳細に分析することにより、話題調整を担う DM *so* は、後続する発話内容や発話行為を導入するにあたって、話し手と聞き手の間に先行文脈に関する何らかの合意が存在することを示す。また、このような DM *so* の使用の背後に存在する会話参与者間の合意形成という概念は、副詞の *so* に記号化された語彙的意味に大きく関連することを明らかにする。

ポスター発表 2/ Poster Presentations 2 (11:30~12:30)

ポスター発表会場 [1 階 A103]

B1. A pilot study of an enhanced Rhetorical Structure Theory based on an analysis of a discourse particle ‘actually’ used in interpersonal settings

MIZUTA, Yoko (International Christian University)

This paper aims to incorporate the insights of corpus-based studies into RST (Rhetorical Structure Theory), taking ‘actually’ as an example. I aim to analyze how the functions of ‘actually’ can be reflected in the RS tree. Specifically, I propose enhancing RST in the following ways: 1) it can accommodate dialogues, besides simple texts, 2) it includes two new relations with which to accommodate several functions of ‘actually’, and 3) it can illustrate interpersonal relations signaled by ‘actually’, besides rhetorical/logical relations. I provide some sample analyses. For the point 1) above, I propose numbering the elements of analysis adding the speaker ID. For the point 2), I introduce ‘p-Antithesis’ (‘presupposition Antithesis’), and ‘FTD avoidance’ relations. For the point 3), I mark interpersonal relations with dotted lines.

References: (1) Aijmer, K. 2002. *English Discourse Particles: Evidence from a Corpus*. John Benjamins. (2) Lenk, U. 1998. *Discourse Coherence: Functions of Discourse Markers in Spoken English*. Gunter Narr Verlag. (3) Mann, W. C. & Thompson S. A. 1988. Rhetorical Structure Theory: Toward a Functional Theory of Text Organization. *Text* 8(3). 243-281.

B2. 新聞社説における結束性の日中対照研究 —語彙的結束性を中心に—

単 艾婷 (九州大学大学院)

本稿は、テキスト性を支える構造的な一要因として挙げられる「結束性」の「語彙的結束性」を中心に、その使用傾向と特徴を分析し、日中両言語の共通点と相違点を明らかにしたものである。新聞社説を分析資料に、Halliday & Hasan (1976)と池上 (1983)を参照に、語彙的結束手段を大きく①「同一語句の結束」と②「関連語句の結束 (a. 同義語・反意語、b. 上位語・下位語、c. 一般語、d. 関連語)」に分類し、分析を行った。その結果は以下の通りである。(1) 全体の傾向として、日中ともに「同一語句による結束性」が最も多かった。割合として顕著な差異が見られなかったが、結束総数では中国語が日本語より上回っている。(2) 「関連語句による結束性」について、日中ともに「c. 一般語」は最も少なく、中国語の社説ではほぼ見られなかった。これは、一般語 (もの、こと、ひと等) 自体の数が非常に少ないことに起因するだろうと考えられる。

参照文献: (1) M. A. K. ハリデイ、ルカイヤ・ハサン著; 安藤貞雄ほか訳 (1976) 『テキストはどのように構成されるか: 言語の結束性』ひつじ書房. (2) 池上嘉彦 (1983) 「テキストとテキストの構造」『談話の研究と教育 I』(日本語教育指導参考書 11) 国立国語研究所 pp.7-42.

B3. 寓話の構造とその多様性

平川 裕己 (神戸市外国語大学大学院)

本論は、寓話(fable)が多様な構造をとることを示し、その動機を明らかにする。伝統的なレトリック研究によると、寓話は教訓を例示する語りである(Abrams, 1985: 6)。これは、寓話では語りの末尾で教訓が示されるという観察に基づく記述である。だが、実際の寓話には、教訓が語りに先行する例や、語りの前後で教訓がくりかえされる例もある。では、寓話がどのように多様になるのはなぜだろうか。

寓話は書きことばで例示(exemplification)を行うディスコースである、という点が重要だ。会話のなかで語りによって主張を例示する行為には、相互行為に動機づけられた一定の手続きがある(Müller & Di Luzio, 1995: 141)。それに対し、書きことばは相互行為を前提としないため、例示に複数の方法が許される。寓話の多様性は、書きことばで具体例を語る方法が複数あるということに動機づけられている。

参考文献：(1) Abrams, M. H. 1985. *A Glossary of Literary Terms*, 7th ed. Fort Worth: Harcourt Brace. (2) Müller, F. and A. Di Luzio. 1995. "Stories as examples in everyday argument." *VS*, 70/71, 115-145.

B4. 日本語会話における「からかい」についての一研究 —からかわれる側の反応を注目する—

呉 青青 (九州大学大学院)

言語コミュニケーションの研究において、友達同士の間の「からかい (teasing)」の発話が表面上攻撃的であっても、それに付随して笑いを発したり、大げさなイントネーションを用いたりすることにより、発話の攻撃性を「遊び」として捉えることができるという指摘がある。「からかい」は日常コミュニケーションにおいて親しさを表す指標となりうる

(Drew 1987)。本研究は、会話分析の手法を用いて日本語会話に現れているからかわれる側の反応の特徴を明らかにすることを目指す。手元のデータに現れたからかわれる側の反応の特徴には、主に次の4つのタイプが観察された。(1) 否定するまたは否定した上で弁明する、(2) 聞き返す、(3) からかう側と同調する、(4) 無視する

参考文献 (1) 初鹿野阿れ・岩田夏穂 (2014) 「話の展開のやり方をターゲットとして『からかい』の分析」、『社会言語科学会第34回大会発表論文集』34-37。(2) Drew, Paul. 1987. "Po-face receipt of teases" *Linguistics*, 25, 219-253.

B5. 佐藤信夫の「逆隠喩」をめぐって：語彙語用論の観点から

山泉 実 (大阪大学)

逆隠喩とは、佐藤(1987)によって新たな比喩の種類として提起されたものである。たとえば、元オリンピック選手の政治家である太郎に疑惑が持ち上がった時に、疑惑に否定的な見解を表明するつもりで「まさか、太郎はスポーツマンだよ」というものがそれにあたり、媒体(スポーツマン)と趣意(率直な者)には外延的な重なりがある一方で内包的な重なりは無いものとされた。本発表は逆隠喩を関連性理論に基づく語彙語用論(Wilson & Sperber 2012: 5章他)の立場から再考し、隠喩と同様にアドホック概念構築として扱う。逆隠喩に関する唯一の先行研究である森(2007)は、逆隠喩は(外延の)拡大で、ステレオタイプを形成する推論と同じとしているものの、逆隠喩はむしろ既に形成されているステレオタイプが関わる縮小(スポーツマン全体から率直なスポーツマンへ)と考えるべきである。媒体

と趣意は対等ではなく、後者は前者を「手がかりとして新しく成立する」(佐藤 1987: 108)からである。

参考文献:(1) Wilson, D. and Sperber, D. 2012. A deflationary account of metaphors. In *Meaning and Relevance*, 97–122 CUP. (2) 佐藤信夫. 1987.『レトリックの消息』白水社. (3) 森雄一. 2007. 「隠喩・提喩・逆隠喩」, 楠見孝 (編)『メタファー研究の最前線』, 159–175, ひつじ書房.

B6. 「非難」を表す疑問詞疑問文の使用動機について

馬 穎瑞 (北海道大学大学院)

本発表は、非難の意味を表す疑問詞疑問文を対象とし、加藤(2009)の「記憶領域」および「文脈」に関する論説を援用し、疑問詞疑問文における「非難」という解釈の獲得を検討する。話し手は疑問詞疑問文で聞き手を非難することの使用動機への分析を通じて、なぜ通常平叙文で表す「非難」をわざわざ疑問詞疑問文で表すのかという問題を解明する。その結果、疑問詞疑問文で「非難」を表す話し手の動機として、①話し手は聞き手を非難しながら、聞き手に「疑問詞」に当てはまる情報を求めようとしている。②話し手は疑問詞疑問文を使うことで聞き手に前提を否定する余地を与えることができる。そうすると、聞き手が話し手の発話に関わってくることになる。話し手は両者が相互作用することによって、コミュニケーションをより活発にさせようとしている。③話し手は聞き手に「私が悪かったこと」を推論させて導こうとしているという3つが挙げられる。

参考文献: (1) 天野みどり. 2011. 『日本語構文の意味と類推拡張』、笠間書院. (2) 加藤重広. 2009. 「動的文脈論再考」、『北海道大学文学研究科紀要』128号、195-223. (3) 加藤重広. 2015. 「発話的な効力と発話内的な効力-日本語の疑問形式を出発点に一」、『日本語語用論フォーラム』、ひつじ書房. (4) 日本語記述文法研究会. 2003. 『現代日本語文法 4 第 8 部モダリティ』東京：くろしお出版. (5) 野田春美. 1997. 『「の(だ)」の機能』東京：くろしお出版.

B7. The Use of Apology Strategies in English by Japanese University EFL learners WILSON, Timothy John (Hiroshima Jogakuin University)

基調講演 / Plenary Lecture (13:00~14:30) A 会場 [1 階 A101]

Chair: HORIE, Kaoru (Nagoya University)

● Understanding Pragmatics

SENFT, Gunter (Max Planck Institute for Psycholinguistics)

Pragmatics is the discipline within linguistics that deals with actual language use. Language use is not only dependent on linguistic, that is grammatical and lexical knowledge, but also on cultural, situative and interpersonal contexts and conventions. One of the central aims of pragmatics is to research how context and convention – in their broadest sense – contribute to meaning and understanding. Thus, the social and cultural embedding of meaning is a central prerequisite for understanding pragmatics. Research in linguistic pragmatics deals with how speakers use their language(s) in various situations and contexts: what speakers do when they speak and why they do it. Pragmatics focuses on the actual language users, their communicative behavior, their world and their point of view. Pragmatics studies language and its meaningful use from the perspective of language users embedded in their situational, behavioral, cultural, societal and political contexts, using a broad variety of methodologies and interdisciplinary approaches depending on specific research questions and interests. Indeed, if we look at core domains of the discipline, we realize that linguistic pragmatics can be regarded as a transdiscipline that is relevant for, and has its predecessors in, many

other disciplines such as Philosophy, Psychology, Ethology, Ethnology, Sociology and the Political Sciences. In this talk I take up this point and discuss a selection of core issues of Pragmatics that were introduced into the field via these six disciplines.

会長就任講演 / Presidential Inaugural Lecture (14:40~15:40)

A会場 [1階 A101]

司会: 山岡 政紀 (創価大学)

● **文脈の科学としての語用論**

加藤 重広 (日本語用論学会会長・北海道大学)